「高齢者のための繊維」特集

身障者の衣服とおしゃれ

岩波君代

1. はじめに

「私達のように身体に障害をもっている人がおしゃれをしたいと思うのはわがままと言われるのよ」と、下半身麻痺の30代の素敵な女性がこぼしていた。今の若い女性からみたら「エーッ、ウソー！」と言うところであろう。しかしそう言っている一方で、身体に障害をもっている人が皆と同じようにおしゃれをしたいと思っているのだというごく当たり前のことをどのくらい理解しているであろうか。

過去多くの場合、一般の人々は、身体に障害をもつ人たちは自分たちと何か違うのだと勝手に思いこんでしまっているところがあるように思う。実は、この「何か」がくせものなのである。そもそも、身体に障害を受けたこと自体はたまたまの出来事なのである。そしてそれは誰にでも起こりうることもとも言えるのである。つまり障害をもつ人が存在すること自体は決して特別のことではなく、ごく日常的なことなのである。

本来、同じ地域社会で暮らし合うべきところを、たまたま身体に障害があることで専門の教育や施設に入所または通所をしていたり自宅に閉じこもってしまいがちになる人たちも多いため、触れ合うどころか存在すら知らないままであることがある。それにより同じ人間であることまでも理解しにくくしてしまっているのである。

したがって、我々はおしゃれについても、単に衣服の問題の本質に迫ることを行ってこなかっただけであり、人間側に問題があるわけではないことを認識する必要がある。

ここではそのような背景の中で、身体と衣服の具体的

な問題と解決策を通して、障害をもつ人のおしゃれとは何かを述べる。

2. これまでの経過

実は、日本ではすでに30年近く前にパラモードという言葉で身障者のファッションショーが開かれており、小冊子も発行されている。下半身麻痺の人がトイレで便利なズボン、松葉杖でも便利なレインコート、上肢障害の人のおしゃれなワンピースなど今でもその悩みがすべて解決しているわけではないような様々な課題がすでにとり上げられていた。つまり障害者からの声はすでにあがっていたが、本腰を入れた取り組みの動きは近年になってからである。その理由としては次のことが上げられる。

- 障害者自身が外出することが少ない。
- 障害をもつ児童が一般の児童と交流する機会が少ない。
- 障害者の絶対数は人口全体からみて圧倒的に少ない上にその問題内容は個性性が強いことから共通性が少なく、既製服業界の中で商売としにくい。
- 障害者の衣服の現状・課題のための実態調査、身体計測などが行いにくい。

以上のような背景の中で、私は、昨年3月までの25年間勤務してきた東京都補装具研究所(昨年3月に廃止)において身障者の衣服の問題を研究テーマとして取り上げ、その解決方法を探ってきた。その主な内容は次の通りである。

- ・重度脳性麻痺者の生理用ショーツの改良・開発
- ・上肢障害者の留め具操作の実験
- ・重度脳性麻痺者の衣服着脱動作の観察

Fashion for Handicapped

著者紹介 KIMIYO IWANAMI

Tokyo Metropolitan Technical Aid Center

東京都福祉機器総合センター

著者は障害者・高齢者に適した衣服の開発を専門とされている。

本稿では身障者の障害別衣服の問題点を明らかにする過程で、年齢を超える身体と衣服の本質的な関係ならびにおしゃれに対する普遍的な考え方を述べていただいた。

- ・脳性麻痺及びリウマチ用ブラジャーの開発
- ・下肢装具装着用スニーカーの開発
- ・車椅子、松葉杖、片麻痺用各レインコートのパターン化
- ・女性用装着型収尿システムの開発
- ・このほか、個別相談に対する技術支援の対応

以上の内容からもわかるように、人間が生活をしているのに最低限必要なことがまだまだ解決されていないのが現状である。このような状況の中でおしゅれは二の次ということになってしまうのである。

障害者だからおしゅれができなかったり苦手なのではなく、機能性が解決されていない状況でおしゅれは考えられないというのが正確なところである。逆に言えば、一般の人たちは衣服を毎日着ること自体や排泄時の衣服の始末に問題があるわけではないから、おしゅれのことが考えられるのである。障害者も最低限の機能性が解決されれば一般の人とまったく同じようにおしゅれを楽しみたいのである。

そこでここでは、障害者のおしゅれを考えるにあたって衣服を選択するための背景となる、障害別にみた衣服の問題とその解決策をとりあげる。

3. 衣服の選択

衣服は、着る人が自分の生活の中でTPOにふさわしいものを、身体状況、季節、好み、価格など様々な条件の中から選択していく。

なかでも身障者の場合は、身体状況が衣服を選択する場合の必須条件になることが多くある。それらの内容は、受けた障害の種類によって共通性が見られる。また、共通することと同時に個別性の強さを含んだ場合が少なくない。

実は、ここに身障者の衣服の難しさがある。

衣服の選択が、障害別にすべて共通しているのであればそれほど問題はないのである。

同じ障害であっても障害レベルは、進行性の病気か、他の病気が合併していないか、着脱を自分で行っているか、介護を受けている場合その体制と誰か、などが大きな条件となる。そしてなんといっても最も大切なことは、尿意があるかどうか、排泄動作が自分でできるかなのである。現在は様々な福祉機器用品が出回っており、排泄に問題をもっていてもいろいろな選択肢がある。しかし、その内容や方法ぬきに衣服の問題やおしゅれの問題は語れない。

ここでは以上の点を障害別にどのような特徴があるのかを述べる。

●障害別にみる衣服の問題点

・脳性麻痺

脳性麻痺者の衣服の問題は、主に上肢(中でも手指)のコントロールの不自由さが着脱動作に影響を及ぼしていると考えられがちである。しかし衣服着脱で最も大切なことは、座位バランスである。着脱動作を行うためには上肢をできるだけ使うようにするが、その他、口や足などを使うことが得意な場合には利用する。

脱衣は、上衣の場合、緊張が強い手でも後衿ぐりをつかんで引っ張ることを繰り返すことで少しずつ脱げてくる。この時、肘を床などに固定させることがポイントである(図1)。

図1 上衣の脱衣

着衣は、袖通しと頭入れの効率よい手順をみつけることが最も大切である。

また、着脱自立が無理な人でもできるだけ着心地がよく、かつその人に似合うものをできるだけ本人が選ぶようにする。

・片麻痺

ここでは、脳卒中や脳梗塞などの後遺症により、片半身に麻痺がある場合の衣服の着脱は、受症後の年数やリハビリの効果によって機能の違いはあるが、基本的には片手だけで衣服の着脱を行うことになるため、着にくい動作のものがある。例えばオープンファスナー、健側の手首のカフスボタンの留めはずし、ネクタイを締める、ファスナーとカギホック付きスカート(またはズボン)などである。したがってできれば着脱しやすいものを選択し、場合によってはちょっとした工夫を施してルールにしたがった順序で着脱を行うことにより、市販服がそれほど問題なく着られるのである。

工夫の一例としては、図2のようにあらかじめネクタイはすでに締めておき、頭からかぶるところをゴムにしておけば、自分の好きな柄が利用できるのもとても便利である。

図2 改造ネクタイ

カフスボタンは、健側だけでもゴム糸で取り付けボタンをはめておけば、留め外しせずに着られる。

ファスナー付きスカートやズボンの場合は、片手ではき上げながらファスナーを閉めるのが難しいので、図3のようにウエストの内側にゴムを取り付けておくことで、受症前に着ていたものがそのまま利用できるのである。

なお着脱の基本手順は、「着衣は、始めに麻痺側の袖や

図3 一般ズボンに内側ゴムをつける

ズボンを通し、その後健側を通す。逆に脱衣は、健側の袖やズボンを始めに脱ぎ、その後麻痺側を脱ぐ」である。

片手で着脱を行うので、麻痺側の袖やウエストが届かず、ねじれたりきちんと上がっていないことを気がつかない場合がある。そのような時は、周囲の人が言葉で伝えてあげるか手伝ってあげるようにする。

・脊髄損傷

脊髄損傷は、事故などで脊髄に損傷を受けたことにより、その部位から下に麻痺の症状を呈する。したがって、損傷位置が上位であるほど重症となる。

一般には両下肢機能障害と同時に排泄障害を伴い、さらに頸髄レベルになると、程度の差はあるものの麻痺は上肢にまで及ぶのである。

日常生活はほとんどの場合が車いすを利用しており、上肢の機能に応じて自走タイプまたは電動タイプが選択される。いずれにおいても排泄の問題は抱えており、状態によって装着式収尿器、パッド類、尿器、トイレのいずれかを選択することになる。この時、自分でトイレが自立できるか、または行いやすくするには、衣服の構造がとても大切な要因となる。

車いすで座っていることが多い場合には、できるだけ座っている姿勢に合わせたズボンやスカートにすることが、着くずれを防ぐことになる。そしてさらに個々に合わせた排泄方法にしたがって工夫されていることが大切となる。例えば尿バッグや収尿器を足に固定しなければならない場合は、その上に着る衣服は、尿チューブの出し入れがいち早く、しかもわずかな力でできるようにするために適切な位置に開きを設けるのである(図4)。

衣服の着脱動作状況は、上肢の程度によって違いがある。腕が肩の高さくらいまで上がり、手の握りや指の引

図4 収尿袋

っかけが多少可能な場合には、衣服の必要な箇所にループを設けたり、リーチャー(遠くに手が届かない場合、引っ掛けたりつかんだりする長い柄の付いた道具)を利用しながら行うことで自立につながっていくのである。

なお、パンツ類の選択には、お尻の下に当たる部分(特に座骨結節周辺)にゴロつくような縫い目をできるだけ避け、少しでも褥瘡を防ぐように十分気をつける。

・関節・筋疾患

関節が硬縮、変形、痛みを伴う慢性関節リウマチや筋力が衰えていく筋ジストロフィー症などは、全身にその症状が現れる。この時、上肢の状況によって着脱動作は大きく左右される。

このような状況の人の衣服は、一般的に軽くゆとりのある衣服を選択する。かぶり式の場合にはマゴの手のような軽い棒を利用して頭をかぶると良い。この時かぶりのデザインの物だけしか着られないと思う必要はない。前あきの半分ほどをすでに留めておくことでかぶり形式での着脱でかぶりのデザインが着られるのである。

また、かぶり式着脱で関節に負担をかけてしまう場合には、前あき式のみとなる。自分で行う場合はボタン掛けが困難な場合が多いので、大きめでつまみやすいボタンやマジックテープに付け替えると良い。

●福祉機器使用からくる衣服の課題

・車椅子

車椅子に座っていることで衣服に共通する問題がある。特に大きい課題としては、

- ・パンツ類が座っている姿勢に合わせること
- ・排泄が少しでもやりやすいような配慮をすること
- ・コート類は、体のサイズに合わせるのではなく、車椅子と身体の両方を包み込むデザインが必要
- ・松葉杖

両脇に松葉杖を使うことで歩行が可能な下肢障害者は、衣服が着くずれる問題をもつ。

その主な内容は、

- ・脇の下に松葉杖のトップ部分を当てて寄りかかることで袖下の縫い目や布を破損させる。同時に服を吊り上げていってしまい、ワンピースやコート類、ブラウスなどの裾を上げてしまう。
- ・両脇に体重を乗せた瞬間に両脇が固定され、次の身体を前進させる瞬間に前身幅を引っ張ってしまうことから前あきがはだけやすい。
- ・義肢装具

人間の手足を失った人がつける義手や義足(まとめて義肢と呼ぶ)類は、当然の事ながら多くの場合は堅い物である。したがって転んだりぶつけたときには一回で破損してしまうことがほとんどである。また、堅くて手足の形状をしているので、袖やズボンを通すことに大変苦労し、

やはり破損も多く見られる。

4. おわりに

人がおしやれをする気持は、身体に障害があるなしには全く関係なく、誰でも同じはずである。ところが、病気や事故で身体に障害があったり老化現象により手足が不自由で衣服の着脱が困難になってくると、本人も周囲の人もなぜかおしやれどころではないと思うようになる。それは、衣服を選択する基準が「介護しやすさ」となり、本人もそのことを認めてしまうからであろう。これは日本において特に言えることのようなのである。

体の不自由な人にとって、衣服の着脱は重要な条件であることは確かである。しかし本来、衣服の選択は着脱の可・不可で決定されるものではないはずである。

健常者のおしやれと身障者のおしやれに違いがあるわけではない。いずれも人間側の条件を知ることが基本となる。

おしやれは、自分を大切にしたい気持ちの表れであり、なによりも元気にしてくれるものである。そして人と出会う気持ちにさせてくれるきっかけとなる。

だから身障者こそおしやれに気を配ってほしいのである。そのためには周囲の理解と協力がなによりも必要なのである。

参考文献

- 1) 岩波君代, 高齢者・障害者の衣服, 日本健康科学学会誌, 12, [3], 134-138, 1996.
- 2) 柳洋子, 高齢者衣料の実証的研究, 早稲田大学人間総合センター, 1994.
- 3) 寺山久美子, 高齢者と排泄機器, 日本リハ工学協会誌, 6, [3], 11-20, 1992.
- 4) 岩波君代, パーソナルケア衣服, 作業療法ジャーナル, 27, [10], 809-813, 1993.
- 5) 手塚直樹他, リハクリニックs no.6, 身体障害と衣服のデザイン, 医歯薬出版, 1975.
- 6) 日本肢体不自由児協会, 手足の不自由な子供たち・はげみ, 10.11月号, 特集一ファッションを考える, 平3.
- 7) 障・高齢者衣服研究交流会, 装いは自己表現 2, 1997.